女の気持

上

平岩弓枝

千岩弓枝

女の気持

上

女の気持（上）

定価六八〇円

昭和四十九年七月十日印刷
昭和四十九年七月二十日発行

著者　平岩弓枝

発行者　高梨茂

印刷　奥村印刷

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

©一九七四　検印廃止

女の気持〈上〉目次

八雲立つ　5
赤い絣　31
法事　58
早春　84
紬の里　108
六月の旅　132
もののまぎれ　155
上布の季節　180
夏の影　206
花火　230

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

女の気持〈上〉

八雲立つ

A

伯備線は倉敷を過ぎると高梁川を車窓にみながら中国山脈へ北上する。

仲原右子が、その女に気づいたのは、新見を過ぎたあたりからであった。冬を迎える一歩手前にあるこの附近の山村は、鮮かに黄ばんだ銀杏と、もう盛りを越えた紅葉が、自然を柔かく彩って落ちついたたたずまいをみせている。

枯れた樹林のせいで、山のふちがぼうっと甘くなっているのを、右子は飽きることなく眺めていた。

東京から岡山まで新幹線で四時間半、伯備線で松江までがざっと三時間半、およそ七時間余の長旅に備えて、好きな作家の単行本を一冊、バッグの中へ入れて来たものの、右子は、殆ど、車窓の風景を眺めっぱなしであった。

久しぶりの旅であったし、伯備線は始めてでもある。

「この線が、もうすぐ複線化するって話じゃないか」
背後で男同士の会話がきこえた。出張らしい二人連れで、右子と同じく新幹線から乗り継いで来たのがはっきりしている。
「山陰線の複線化より早いんじゃないか」
新幹線が岡山までのびて急に脚光を浴びて来たローカル線である。特急列車も日に八本走るようになった。
車内販売の車がまわって来て、右子はジュースを買った。
よく晴れていて、秋の陽がいっぱいに座席まで射し込んでいる。
なにげなく、その女をみたが、相変らず窓へ顔をむけたまま、身動きすらしない。なにをしている人だろうと、右子は思った。
派手な美貌というのではないが、目立つ美しさであった。
水商売ではない。ひっつめた髪とあかるいグレイを感じさせる紬の着物に、くすんだ藍のかすりの道行は、むしろ、年齢より地味な印象である。三十をいくつか越えたと思われる年頃から、おそらく人妻と判断するものの、ただの素人の奥さんではない何かが、右子の眼を惹いた。
北から南へむかって流れていた高梁川が、いつの間にか車窓から消えて、再び現われた川は今までとは逆に南から北へ流れ落ちている。日本海、美保湾に河口を持つ日野川であった。日野川との別れが、米子である。いくらか疲れをおぼえて、右子は傾きかけた陽をみつめていた。

暮れかけた空に、薄く浮んでいた大山も遠ざかって、冷えが車中に忍び込んでいる。
松江到着を予告するアナウンスがきこえて、右子は流石に待ちかねたようにコートを着、スーツケースを下した。
ふと見ると、三つほど前方の、例の女性も立ち上って身仕度をはじめている。彼女も松江で下車するのかと思った。この列車の終着駅は出雲市である。
車輛の出口で、右子はその女性のすぐ後に立った。かすかに香料の匂いが感じられる。なんという名の香水か知らないが、如何にもその人にふさわしい香りだと思う。
プラットホームに下りたところで、その女性は立ち止った。前後左右をみまわしている。迎えを探している様子であった。
右子は改札口へさっさと歩く。兄の健作は、出口のわきに突っ立っていた。右子がみつける前に、右子をみていた。
「ホームまで出ていてくれるかと思ったわ」
顔をみたとたんに甘えが出た。
「何号車かきいてなかっただろう。うっかり、すれ違いになってもまずいと思ってね。入場料、倹約したよ」
笑って、スーツケースを取る。兄の手が軽く、妹の肩を抱くようにして、車の停めてある場所へ連れて行く。

「疲れたか」
「そりゃあ、八時間ですもの」
「八時間なら御の字さ。俺は二日がかりで運転して来たんだぞ」
東京から自分の車で松江へ来ていた兄である。コマーシャルフィルムの撮影で、一週間ほど松江に滞在している。
「スタッフは今朝、帰ったよ」
「仕事、うまく行ったの」
「まあな」
夕方の雑踏の中を、車は走り出していた。
「珍しいわね。お兄さんが仕事先に呼んでくれるなんて……」
「松江へ行ってみたいっていってたじゃないか」
「仕事先へ行きたいっていったのは、今度がはじめてじゃないわよ」
「母さんがね、お前を出雲大社へおまいりさせてくれとさ」
「出雲大社……?」
「縁結びの神さまさ。ぼつぼつお前を結婚させたがっているんだろう」
「なんだ、馬鹿にしている」
「松江はいいところだったよ。呼んでやりたい気もしたんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宿は繁華街の奥にあった。
湖にむいて建っている、二階の部屋であった。
「おいで……もう陽が沈みそうだ」
湖側のガラス戸の傍に立つと、眼の下は宿の庭であった。
庭からすぐ湖になる。芝生の中に松をあしらった庭に三、四人、宿の丹前を着た男達が夕陽にカメラをむけている。
赤い太陽が正面より、やや右手に沈みかけていた。
「あの橋がなかったら、もっとよかった」
夕陽と旅館との間に、新しい橋があった。
「この前、松江へ来て、ここの家へ泊った時は、あの橋はなかったんだ」
日輪が消えても、湖には残光がただよっている。
その時、隣室に客の通る気配がした。
この旅館の二階は、狭い階段を上ったところの左右に襖があり、左側が右子達の部屋、右側にもう一つ、同じ程度の部屋があるらしい。
窓をあけていたのと、昔風の建築だけに、案外、隣室の声が聞えるのである。
「あいにくでございましたね。今、陽が沈んだところで……。ここも、橋が出来ましてからは眺めが悪うございましてね」

女中の声はあたりかまわず大きく、それに答えている声は低い。
「それじゃ、お食事はご主人様がお着きになってからになさいますか」
高々といって、女中が廊下へ出て行った。
「おい、右子、風呂へ入れよ。飯は六時に頼んであるんだ」
妹と並んで、隣室の声をきいていた健作が、気がついたようにうながした。
夕食をすませてから、右子は健作に連れられて、夜の松江の町を散歩した。はやばやと大戸を下した店も多く、町はどこもひっそりとしている。土産物屋で、着いた早々になんだと健作に笑われながら、白兎と大黒様のこけし人形を買った。
「太一ちゃんへのお土産……」
健作の一人息子である。産まれて半年で母親が死んだから、ずっと、鎌倉の、右子の両親である祖父母が育てている。右子にとっては甥だが、そんな関係で、むしろ小さい弟という感じであった。
「お兄さんは、太一ちゃんになにを買ったの」
「いや、まだだ」
「ひどいパパね」
「帰るまでには買う」
ふっと兄の顔の翳(かげ)りに気づいて、右子は背を丸めた。

「おお寒い。やっぱり山陰ね」
宿へ戻ってくると、帳場で声がした。
「困っちまうねえ、九時で板場は火を落すんだから……ご主人待ってるっていったって……ちょっと遅すぎるんじゃないの」
「本当にご主人なんですかねえ」
「とにかく、ちょっとうかがってみなさいよ、お食事、どうするのか」
帰って来た兄妹に気がついて、女中が出迎えた。
「お帰りなさいまし、外はお寒うございましょう」
それで女中同士の会話が途切れた。
二階へ上りながら、右子は女中達の会話の主が、隣室の客らしいと気がついていた。待ち合せているのが、ご主人様ということなら、隣室の客は女である。
部屋の前へ立った時、隣室の襖(ふすま)があいて女の顔が出た。
はっとしたのは、右子がなんとなく心にえがいていた女がそのまま、そこに立ちすくんでいたからであった。
同じ列車の、例の女である。
「小西さん……」
声をかけたのは、右子のあとから上って来た健作である。

女が立ちすくんだのは、右子をみたからではなく、背後の仲原健作を認めたせいとみえた。
「その節は、いろいろとありがとう存じました。お久しぶりでございます」
小腰を屈めた姿は落ちついているようでいて、どこか狼狽がみえる。
「妹の右子です。僕がコマーシャルの仕事でこっちへ来ていたものですから……こいつが今日、来まして……仕事も終りましたから、このあたりを観光案内してやろうと思って」
狭い階段の上での紹介であった。
「小西屋でございます。弟がお世話になりまして……」
名前をいわず、屋号を名乗ったのが、右子にはいささか奇異に感じる。
「ご旅行ですか」
健作が訊ね、相手は視線を伏せた。
「この先の米子に浜絣（はまがすり）というのがございまして……」
「弓ヶ浜絣ですか」
「はい……それをみに参りました」
「そうですか……」
「お兄さん……」
さりげなく、右子は兄をうながした。相手の困惑がはっきりわかる。
「失礼しました……」

会釈をして健作が自分達の部屋へ入った。階段を女中が、ばたばたと上ってくる。
「どこの人……」
部屋へ入って、戸をしめてから声をひそめた。
「銀座の、小西屋という紬の店の若奥さんだ」
「大きな声を出さないで……お隣に聞えるのよ」
戸をしめ切っても、女中の声が筒ぬけであった。食事の催促をしている。答えている女の声は聞きとれない。
「どうして、お兄さん、あの方を知っているの」
学生結婚をして、その妻と二年目に死別したきり、やもめの兄であった。
「あの人の弟さんが……ご主人の弟さんだそうだが、カメラをやっているんだ、井上さんの助手をしていて……ムービーをやりたいので、僕の事務所にどうかと、井上さんから紹介された、その時、あの人が一緒だったんだ」
「逢ったのは一度きり……」
「いや、赤坂の事務所に、あとで弟さんを連れて挨拶に来て……食事を一緒にしたよ」
「それから……」
「馬鹿、それだけだ……」
「呉服屋さんか」

道理で着物の着こなしが抜群だと右子は思った。
「伯備線で一緒の車輛だったのよ。きれいな人だと思ったわ」
答えず、健作は立ち上った。
「風呂へ入ってくる」
二間続きの部屋を、湖と反対の方角へ出ると風呂場がある。
もう一週間、入りなれた湯舟へ健作は肩まで沈んで眼を閉じた。
こんなところで、小西亮子に逢うとは思いがけなさすぎた。
意外は、もう一つある。
写真家の井上謙一郎の話では、たしか小西亮子は夫と別居している筈であった。
「ご主人は家業を嫌って、福岡のほうへ転勤しているそうだ」
雑談の中できいたことだが、不思議なほど心に残っている。
小西亮子は、福岡にいる夫と、この松江で待ち合せているのだろうか。米子の弓ヶ浜の浜絣をみに行くというのは嘘ではあるまいが、その仕事だけが目的なら、なにも、松江まで来る必要はなかった。
米子にはホテルもあるし、近くの皆生(かいけ)温泉にはよい旅館が軒を並べている。伯備線で来ながら、米子を通り越して松江まで来たところに、小西亮子の真意があるようであった。
夫という男は、家業を嫌って家を出ているのだから、無論、浜絣などには興味もないに違いな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com